くまもとアートポリスプロジェクト　熊本駅東口駅前広場及び関連施設整備

「建設進む！東口駅前広場現場最前線」

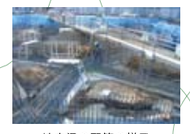
熊本駅東口駅前広場の上屋の新築工事が平成21年8月に始まった。

平成19年11月、公開プロポーザルによって選ばれた東口駅前広場の設計者は西沢立衛氏。西沢氏は、2度も日本建築学会作品賞を受賞するなど、日本を代表する建築家の一人として認められている。特に、建築家妹島和世氏と組む建築ユニットSANAAでは、パリ・ルーブル美術館が新たに建設する分館「ルーブル・ランス」の設計コンペで、世界中から120もの応募がある中、見事設計者として採用されるなど、世界的にもその活躍が注目されている。

今回、熊本駅前で着々と進む上屋工事の様子を特集した。

地中梁、鉄骨柱立込（2009年10月）

上屋は、14本の鉄骨柱によってコンクリートの屋根スラブを支える明快な構造。鉄骨柱は、堅固な地中梁によって支えられている。



地中梁の配筋の様子

配筋作業を行う職人たち

現場を確認する設計者 西沢立衛氏

軌道の敷設（2009年11月）

上屋の下に路面電車の軌道を敷設。路面電車の軌道は、熊本駅から南はサイドリザベーションという新しい手法によって整備される。心地よい木漏れ日の中を走る市電によって、森の都を体感する空間を創出することを目指している。

※サイドリザベーション
路面電車の軌道を道路の端によせて敷設し、車道との区別を行う軌道。

駅前広場全景（2010年3月）

鉄筋、PC鋼線の組立（2009年12月）

コンクリートの屋根スラブは、プレストレスト・コンクリート構造を採用することにより40cmの薄さを実現。コンクリートに圧力をかけるためのPC鋼線を配する。

※プレストレスト・コンクリート
PC鋼材を使って、荷重が作用する前にコンクリート部材に圧縮力がかかった状態（プレストレス）とし、荷重を受けた時にコンクリートに引張応力が発生しないようにする、もしくは引張応力を制御するものである。一般的な鉄筋コンクリートよりも引張応力によるひび割れを防ぐことができる。

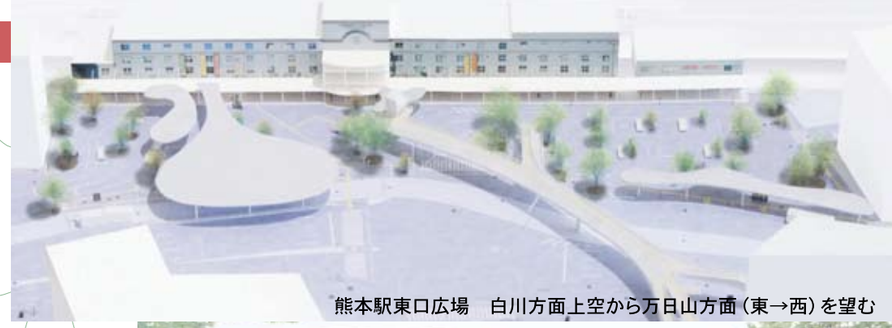
PC鋼材の配置箇所には補強筋を入れる

コンクリートスラブ配筋の様子

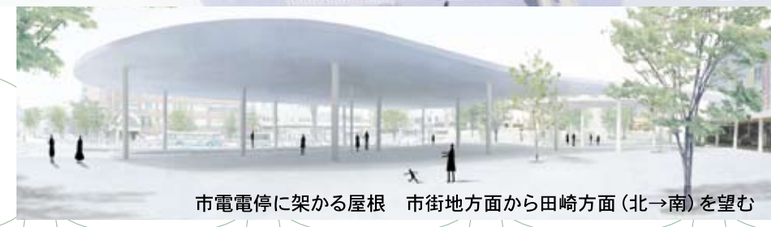
構造評価委員による現場確認

※構造評価委員会
上屋の構造に係る設計及び施工等の安全性を確認するため、県が設置した評価委員会。
評価委員は、三井宜之熊本大学名誉教授（建築構造の専門家）を委員長とし、鈴木計夫大阪大学名誉教授（プレストレストコンクリート構造の権威）及び田邊清士氏（構造設計一級建築士、構造計算適合判定員）の3名。

構造評価委員会の様子



熊本駅東口広場　白川方面上空から万日山方面（東→西）を望む



市電電停に架かる屋根　市街地方面から田崎方面（北→南）を望む

※プロポーザル時の提案であり、完成予想図ではありません　（資料提供:西沢立衛建築設計事務所）

西沢立衛氏の提案は「雲のような屋根」。駅前広場に求められる機能をおおらかに包み込む屋根によって、様々な空間と環境をつくりだす。

審査委員長の伊東豊雄アートポリスコミッショナーは「雲のような屋根というのは非常にニュートラルでさわやかな提案。一方でインパクトがあり、他の駅にはない空間の質を創り得る。」と評価した。

公園のような開放的な空間は、すべての利用者が安心してゆっくりと利用でき、様々な活動がどこにいても感じられるような開かれた場所となるだろう。

現場に設置したモックアップ

モックアップには配筋やPC鋼線配筋用のシース管をセット

コンクリート打設後の固まり具合を確認

※モックアップ
屋根スラブの配筋及びコンクリート打設に先立ち、5m×5m、厚さ40cmのモックアップ（実物大模型）を製作。高強度コンクリートの流動性、施工性などについての事前確認を行った。

コンクリート打設の様子

構造評価委員による現場確認

コンクリート表面仕上げは夜間に及んだ

コンクリート打設、PC緊張（2010年1月）

コンクリートは高強度コンクリートを採用。コンクリート打設後、強度を確認してからPC鋼線を緊張する。

PC緊張の準備の様子

PC鋼線を緊張し、鋼線の伸びを確認

左から緊張後、緊張前、緊張後に切断処理した鋼線の様子

シンポジウム報告「モクバンに見る新しい木造建築の可能性」

全国各地から延べ566名の方がコンペに参加した熊本の木造建築プロジェクト「球泉洞休暇村木造バンガロー（モクバン）R2」。

地場産木材の新しい利用方法を提案したモクバンの第2弾が遂に完成した！

平成21年7月モクバンR2「Wooden Lace」完成を祝うシンポジウムを開催し、木材の第一人者である有馬孝禮氏をお迎えし、新しい木材利用の可能性を探った。

また、シンポジウムに先立ち開催されたオープンハウス（見学会）では、設計者の渡瀬正記氏、永吉歩氏による説明会があり、多くの建築ファンが訪れ、完成したモクバンR2が織りなす空間を肌で感じていた。

（出演者）

有馬孝禮
宮崎県木材利用技術センター所長
東京大学名誉教授

伊東豊雄
建築家
くまもとアートポリスコミッショナー

犬童義一
球磨村森林組合組合長

桂英昭
熊本大学准教授・建築家
くまもとアートポリスアドバイザー

末廣香織
九州大学准教授・建築家
くまもとアートポリスアドバイザー

曽我部昌史
神奈川大学教授・建築家
くまもとアートポリスアドバイザー

永吉歩
建築家
モクバンR2
「Wooden Lace」設計者

渡瀬正記
建築家
モクバンR2
「Wooden Lace」設計者

はじめに設計者の渡瀬正記氏、永吉歩氏が建築にあたって直面した様々な問題や、完成に至るまでの経緯を説明。紆余曲折を乗り越え、作り上げた、「Wooden Lace」は、当初のコンセプト、木のレースを編みこんだイメージを損なうことなく、柔らかい木の魅力が引き出された工芸的な仕上がりとなった。事業主体である球磨村森林組合の犬童義一組合長は「度重なる打合せと、非常な労力をかけ、限られた予算内で環境に優しいバンガローが出来た。設計者をはじめ携わった多くの関係者に感謝したい。」と述べられた。モクバンR2の審査にあたった伊東豊雄アートポリスコミッショナーは、「木造の考え方を変えるようなものができ、前回の藤本モクバンとの対比で、画期的な空間ができあがった。純粋に木造の新しい可能性が広がった。」と印象を述べられた。

「Wooden Lace」について、宮崎県木材利用技術センターの有馬孝禮所長は「柔らかい空気を感じた。使用されている木材の多さが、人にどのような影響を与えるかというよい実験にもなる。大事なのは木の性質を素直に受けとめ、問題から逃げずにどう対処するかということ。いろんな可能性があっていいし、チャレンジした方がいい。」と意見が述べられた。

シンポジウムの様子

木造建築はジェネレーションを超える連携を考えること

「木」は我々人間以上の個性を持っている存在。個性を考えながら、その木とどう向き合っていくかが重要である。

「木造をつくるということは『ジェネレーションを超える連携を考える』ということである。」と有馬氏はいう。「木造は芽を出したときからがスタート。建物をつくり、維持管理することとあわせて考えてほしい。そして、関係者は生命あるものを創ったものとして素直に向き合い、どうやったら共存するのかを連携して考えることが大事である。（有馬氏）」犬童組合長は「管理面などの問題をクリアしながら、皆さんと一緒に考え、守っていきたい。皆さんには木材をたくさん使ってよい建築を創っていただくことを願っている。」と発言された。

また、「木材はたくさん使うことが価値を生む可能性がある。それがいろいろな意味で循環する資源としての機能を果たすことになる。（有馬氏）」、「新しい木を植えることは環境を守ること。そのためには山村に人を残すことが重要。人が木を植え、川を綺麗にし、海を綺麗にする。もととなる山村をしっかりと守っていきたい。（犬童組合長）」と述べられた。

最後に伊東コミッショナーから「使い方によって建築というものはどういうふうにも変わっていく。つまり、創造的なものを創るということは結果がわからないものをつくることでもある。もう少し何かできるのではないか、という気持ちが未来を変え、私たちに勇気と、そして楽しみを与えてくれる。それがアートポリスの最大の役割だと思う。」と締めくくった。

モクバンR2「Wooden Lace」オープンハウス

設計者の声

渡瀬正記氏 永吉歩氏

こうして完成した姿を見ると、それなりにすでに環境の中でこの建物がたくましく育ってきているという印象を持つ。

当初より、創るからには自分たちにとっても楽しく面白いものに取り組みたいと思い、できたのがこの「Wooden　Lace」。木のレースを編みこんだようなデザインのバンガローに仕上げようと短い木の部材を使い、リズミカルな隙間を作っていた。

自然の木を見せながらこれまでにない風合いのすごくきれいな印象の建物に仕上がった。木は生き物。長い歳月のなかでは、木や樹脂のメンテナンスも必要になる。同時に年々木の色は少しずつ落ち着いた色をかもし出し、その変化を見ていくことも、このバンガローの楽しさだと思う。

今回、木造の新しい可能性とあわせて、アートポリスという刺激的でやりがいのある仕事に出会うことが出来たことに感謝したい。

渡瀬正記氏（左）永吉歩氏（右）

くまもとアートポリス　市民大学

アートポリスシンポジウムin菊池
「まち活性・足湯」

菊池市長の挨拶

アートポリスシンポジウムin菊池「まち活性・足湯」が平成22年2月7日（日）、菊池市文化会館で開催された。

冒頭、福村三男菊池市長は菊池市の生活・観光拠点として「足湯のあるアートポリス施設の活用により、菊池市が以前の賑わいを取り戻し、後世にまで残り得るようなものとなることを期待したい。」と抱負を述べた。

基調講演「まちの魅力づくりと足湯」

堀 繁氏（東京大学アジア生物資源環境研究センター教授）

堀繁氏による基調講演

まず始めに、堀　繁氏が「まちの魅力づくり」について講演。「人が来なければ、元気のない街になる」という課題を示され、人を惹きつける魅力ある街づくりについて解説。

魅力ある街とは人間を大切にした整備、デザインがなされているものであり、おもてなしのメッセージを発するため、道路の美装化やベンチ・休憩スペースの設置の必要性が示された。特に、足湯はもてなしの魅力のひとつとして極めて有効に機能することが指摘された。

「「まちの魅力づくり」のコツは人間を心の底からもてなし、その心をかたちにし、それが極めて丁寧につくられていて、魅力的に見えるようにすること。菊池はとてもポテンシャルが高く、まちづくりのやりがいがあるところ。自信と誇りを持って頑張っていただきたい。」と今後のまちづくりに期待を寄せた。

菊池市街地ポケットパークは、訪れる人の交流・滞留の場として、また、地域住民の憩いの場として、面的な出会いの空間の創出を目指し計画された。足湯や水路などの親水機能など、菊池の文化や自然（水）とのふれあいができる特色ある施設整備が期待されている。

設計に先立ち住民ワークショップを開催。まちの記憶＝遺産を未来のまちなみデザインへと繋げる協働作業の成果は、ポケットパークデザインのアイディアを生むヒントとして活用された。

上町地区

切明地区

横町地区

（写真提供:塩塚隆生アトリエ）

プレゼンテーション

「菊池市街地ポケットパーク」

塩塚隆生（建築家・菊池市街地ポケットパーク設計者）

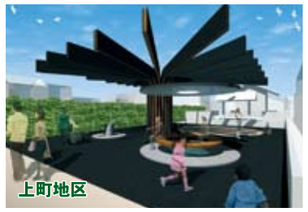
設計者である塩塚氏のプレゼンテーションでは、菊池市の中心部は道が狭く、車より徒歩移動に適しているという利点を挙げ、「設計前に行ったワークショップにおいて、街の出来事、記憶、写真を参加者に持ち寄ってもらい、それを地図に貼り込んでいった。街の歴史、人の思いを明らかにすることができたことは、菊池市街地ポケットパークを設計するうえで貴重なヒントになった。」と述べ、次のとおり設計にあたってのポイントを挙げた。

上町地区… 場の豊かさ、シンボル性を表現したいと考え、大樹をイメージしたモニュメントをつくり影を落とすように工夫。

横町地区… 公民館の代わりにもなるような、住んでいる人が日常的に使う場所として、視界を遮らないようにし、囲まれた円形で中心に向かって坐るように配慮。

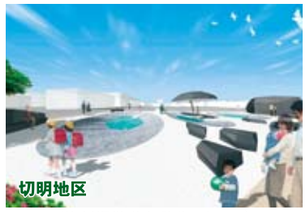
切明地区… 街の玄関という性格を大事にし、それぞれ自由な方向へ往き来できるよう配慮。

塩塚隆生氏によるプレゼンテーション



上町地区

横町地区



切明地区

（資料提供:塩塚隆生アトリエ）

ディスカッション

「まちの起爆剤」

（出演者）

伊東 豊雄
建築家
くまもとアートポリスコミッショナー

久保 房儀
地元3地区代表

川津 清一
菊池温泉観光旅館
協同組合理事長

塩塚 隆生
建築家
菊池市街地ポケットパーク設計者

堀 繁
東京大学アジア生物資源
環境研究センター教授

曽我部 昌史
神奈川大学教授・建築家
くまもとアートポリスアドバイザー

始めに、地元3地区の代表である久保房儀氏が地区内の古い街並みが残る御所通りについて紹介。700年の歴史に培われた文教のまち“菊池”を背景としたまちづくりの取り組みについて語った。続いて、川津清一氏から菊池市内の既存の足湯について説明。出演者から、物産館に隣接する既存の足湯は閉鎖感がなく、開かれた空間であること、スケール感がよいこと等が高く評価される一方、周囲との一体感がないことが課題として指摘された。堀氏から「人は『居心地よくもてなしてくれる』ところに惹かれるもの。本当に理想的なのは入らなくても居心地よいと思わせる足湯である。更に、足湯から見えるところに興味の対象をつくり、歩いてみたいと思わせることが大事。」とアドバイスがあった。

また、伊東豊雄アートポリスコミッショナーは「このポケットパークはコミュニティのための施設。それと同時に、町を元気にするために観光客を呼び込む最初のステップである。」と述べ、「歴史や伝統にとらわれずにとびきり新しいものを創ってほしい。本当の意味で新しいものをつくるということは、逆に歴史と伝統がみえてくるということである。」と語った。

最後に、曽我部昌史アートポリスアドバイザーが「菊池での試みが全国のさきがけとなれば、この町に人が集まるきっかけになるのではないか。」と締めくくった。

参加者との意見交換

参加者の声

- 「歴史文化を制約とせず、新しいものが逆に歴史文化を大切にさせるという視点は面白かった。若者が定住するだけの魅力と経済力が菊池に生れていく、その一歩であるよう期待したい（男性50代）」
- 「人が主役になるような整備の方向性が理解できた（女性60代）」

宇城市立豊野小中一貫校 住民参加ワークショップ開催

第1回住民参加ワークショップ　伊藤俊介氏による基調講演

※H20年12月のプロポーザル時の提案であり、今後変更となる可能性があります。

平成20年に実施された宇城市立豊野幼・小中一貫校公募型プロポーザル。その後の事業の見直しにより、施設一体型小中一貫校として整備されることが改めて決定され、今年再スタートを切った。

設計は、プロポーザルで選ばれた横浜在住の小泉雅生氏（小泉アトリエ）と地元熊本の牧野朋子氏（ＳＤＡ建築設計事務所）が担当する。プロポーザル時の提案は、豊野中学校を囲むようにＳ字型に新校舎を配置するもの。住民や保護者、児童・生徒とともにワークショップを行いながら、地域と学校、児童・生徒と住民を「つなぐ」ことをキーワードに設計が進められている。

『期待の木・不安の木』では、児童・生徒、保護者や教職員、地域に住む人々から豊野小中一貫校に対する期待や不安の声を寄せてもらった。

第1回住民参加ワークショップ「豊野ギャラリー開所式」

まず始めに、倉斗綾子氏（首都大学東京大学院都市環境科学研究科客員研究員）から小中一貫校のメリットや課題などを全国の取り組みを例に解説された。次に、講師として招かれた伊藤俊介氏（東京電機大学情報環境学部准教授）より、教師や児童・生徒は学校＝建物を実際どのように使っているかを検証した実例などが発表された。

小学校から中学校への環境の変化による影響や、より柔軟な教育指導の必要性とともに、建物の構造、空間設計の重要性が述べられると、参加者からは期待と不安の両面から多数の意見が出された。

第2回ワークショップ「こんな授業がしたいワークショップ」

教職員を対象として開催されたワークショップでは、教職員が事前に考えた要望・意見を活動形態によって分類しつつ、実現のために中心となって取り組む主体について考えた。行政、教職員、地域及び設計者が一致団結して取り組むことの重要性を再認識したワークショップであった。

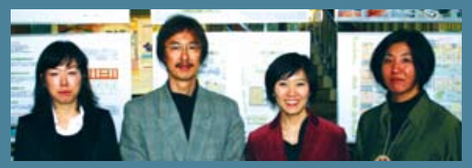
第3回ワークショップ「豊野の学校を育てよう」

保護者、教職員、地域住民を対象としたこのワークショップでは、改めてこれまでの経緯の説明と、『期待の木、不安の木』に寄せられた地域住民、子どもたちの意見の発表があった。

子どもたちが生き生きと育つ学校であるために、学校と地域と子どもとのつながりが大切であることが再確認され、参加者からは設計案やグランド・プールの使い方、時間割等教育指導の方向性など、幅広く活発な意見が出された。

設計者の声

ようやくスタートした。住民の方々の真剣さと期待を強く感じた。責任感をもって納得のいくものを創りあげていきたい。課題は山積しているが、話合いの中でひとつひとつクリアしていければと思う。住民の方の意見を反映し、長く使われる建築物として、よりよいものを目指す。今後も住民の方に積極的な参加を希望し、活発なご意見をいただいたうえで、豊野の風土、気候を反映させた設計を行いたい。



左から
牧野朋子氏（設計者:SDA建築設計事務所）
小泉雅生氏（設計者:小泉アトリエ）
倉斗綾子氏（首都大学東京大学院都市環境科学研究科客員研究員）
辻香氏（関東学院大学工学部建築学科非常勤講師）

くまもとアートポリスプロジェクト進行中

宇土市立宇土小学校・網津小学校

対話の中でデザインを考える、宇土市の学校プロジェクト。教育立市を目指す宇土市の地域性を踏まえ、先生方をはじめとするＰＴＡ、地域住民の方々による改築検討委員会、実物大空間を体験しながらの児童とのワークショップなど、デザインワークが繰り返し行われてきた。これらの計画は平成21年秋に工事に着手し、地域づくりまでを視野に入れた、開かれた学校がいよいよ形をなそうとしている。

宇土市立宇土小学校

宇土小学校の模型（写真提供:CAt）

小嶋一浩氏と赤松佳珠子氏（シーラカンス　アンド　アソシエイツ（CAt））が設計する「宇土市立宇土小学校」の特徴は「教室」づくりにある。教室の壁をＬ字型に配置してコーナーをつくり、同時に外にむかっても広がりのある構造としている。また中央に配置される体育館をもひとつの教室として捉え、用途の可能性を広げる新しい空間が生まれようとしている。生き生きとした子どもを育む新しい「宇土タイプ」の学校の実現を期待したい。

宇土市立網津小学校

設計者の坂本一成氏（アトリエ・アンド・アイ）はこの地域の豊かな田園風景に溶け込む、連続したヴォールト（かまぼこ型）の屋根を提案。「大きな庇の家」というテーマで、子どもたちに優しく温かみのある学校とし、子どもたちが元気に多様な活動ができる空間を目指す。

網津小学校のパース
（資料提供:アトリエ・アンド・アイ）

（写真提供:宇土市教育委員会）

熊本駅西口駅前広場

公開コンペにより選ばれた佐藤光彦氏（佐藤光彦建築設計事務所）が設計する熊本駅西口駅前広場もいよいよ工事に着手する。

東口駅前広場の『屋根』に対し、西口駅前広場では『壁』を特徴とする対比的なデザインを提案しており、機能を集約したルーフ（屋根）とスクリーン（壁）により半屋外の公園のような空間を目指している。

西口駅前広場のパース

西口駅前広場内部のパース

熊本の豊かで質の高い地下水をアピールするため、湧水をイメージさせる親水施設の提案も新たに加わり、新しい『熊本の顔』の誕生が待ち遠しい。

（資料提供:佐藤光彦建築設計事務所）

新規プロジェクト紹介

白川河川敷利活用事業(公衆トイレ)

熊本市中心部を流れる白川の河川敷広場利用者のために整備される小さな公衆トイレのプロジェクト。敷地は熊本駅東の白川橋のほとりに位置し、熊本駅東口駅前広場（西沢立衛氏設計）、白川橋景観整備（藤江和子氏設計）といったアートポリスプロジェクトが連続して立地しているところである。駅周辺と白川をつなぐ回遊性を生み出すキーポイントとなることが期待される。

このプロジェクトの設計者に選ばれたのは、太田浩史氏。太田氏は、素材や工法の問題からまちづくりまで、幅広い視点で今日的建築を構想することで知られる建築家である。その活動は多岐に渡り、東京大学生産技術研究所で教員として研究教育活動を行う傍ら、設計活動、あるいはアーティストユニット「東京ピクニッククラブ」で、建築や都市に関わるさまざまな表現活動を行っている。

来春の完成を目指して、すでに周辺地区の皆さん方とのワークショップなどを行いながら設計を進めている。白川河川敷の景観との調和について、丁寧にデザインを追求することが期待される。

ワークショップの様子

プロフィール
太田　浩史（デザインヌーブ）
東京大学生産技術研究所講師。建築家。
東京都生まれ。東京大学工学部建築学科卒業後、2000年　デザインヌーブ設立。
2009年より東京大学生産技術研究所講師。東京ピクニッククラブを2002年より主宰。
※作品、主なワークショップ実績
東京大学検見川キャンパスセミナーハウス、大内山野鳥観察舎、久が原のゲストハウス、ビクノポリス(ワークショップ/東京ピクニッククラブ)

新規プロジェクト紹介

熊本南警察署熊本駅交番

プロフィール
アストリッド・クライン＋マーク・ダイサム
（クライン・ダイサム・アーキテクツ）

●アストリッド・クライン
イタリア生まれ。
1988～90年伊東豊雄建築設計事務所在籍2006年米国カリフォルニア大学バークレー校講師
●マーク・ダイサム
イギリス生まれ。
1988年～90年伊東豊雄建築設計事務所在籍2006年米国カリフォルニア大学バークレー校講師

平成23年春の九州新幹線全線開業を目前に控え、急ピッチで整備が進む熊本駅周辺地域。この地域の新たな拠点として熊本駅交番が整備されることとなった。この程設計者として、アストリッド・クライン氏とマーク・ダイサム氏（クライン・ダイサム・アーキテクツ）が選ばれた。クライン・ダイサム・アーキテクツの活動は、建築や空間のデザインを通して、人々の生活をいかに豊かにできるかを探求していることで知られており、その活動は建築設計だけにとどまらず、プロダクトデザインやアートイベントの主催など、幅広い。

敷地は、熊本の玄関口のひとつとして重要な立地にあり、設計にあたっては様々な要素が絡み合った高度なデザイン力が求められるが、その街に最も相応しい表情をまとう建築の提案を得意とするこの二人には、そのような難しさをこの場所らしい表情に変換してくれるに違いない。

完成は来春を予定しているが、駅を利用する県内外の人々の安全を見守ると同時に、この地域に住まう人々の信頼と期待にこたえる拠点施設であり、今後の提案に期待したい。

くまもとアートポリス受賞報告

地域資源活用総合交流促進施設が第4回日本構造デザイン賞を受賞

構造デザイン活動の活性化と建築文化の発展を目的とし、優れた構造設計者に贈られる日本構造デザイン賞。第4回となる2009年作品賞に、「地域資源活用総合交流促進施設」（構造設計者:佐藤淳氏(佐藤淳構造設計事務所)）が選ばれた。

地域資源活用総合交流促進施設（事業主体:芦北町）は、第76番目のアートポリスプロジェクトとして高橋晶子氏＋高橋寛氏（ワークステーション）が設計したが、その提案には『先駆的な木構造を有すること』が求められており、構造家佐藤淳氏とのコラボレーションによって生みだされた。『木をかごのように編む構造』は世界的にも類例のない構造として注目されている。

地域資源活用総合交流促進施設　（撮影:濱口廣一郎）

第15回くまもとアートポリス推進賞

県内の優れた建造物に贈られる「くまもとアートポリス推進賞」も15回目を迎えた。今回のくまもとアートポリス推進賞の応募は36件。書類審査と現地審査を経て、最終選考を行い、推進賞4作品、推進賞選賞4作品に決定した。選考委員からは、毎年質の高い優れた作品の応募があり、アートポリスの成果が着実に浸透していることが感じられると高い評価を得た。

推進賞

畑の中の一軒家

川上酒店

i-CUBE #01

光の森の住宅

推進賞選賞

桜木の家

R-house in 梶尾

YMCA赤水保育園

下通2・3・4番街アーケード

視察状況

ブリスベン市クイーンズランド工科大学
（オーストラリア）

くまもとアートポリスは近年海外から多くの視察者を迎えており、平成9～21年度で累計4,000名以上に達した。特に韓国からは毎年多くの視察者を迎え入れている。当初は建築関係者や学生を中心としていた視察者層が最近では政府関係者やマスコミなど、様々な分野の方々に広がってきている。

また、日本国内からの視察としては、地方議会関係者が増加しつつあり、20年以上に及ぶ一貫した取り組みが熊本の独自性を産み出す文化として根付いてきていることを評価されつつある。

テキサス州サンアントニオ市テキサス大学
サンアントニオ校（アメリカ合衆国）

くまもとアートポリス海外巡回展（国際交流基金主催）

日本人の美意識や日常生活に根ざした芸術文化、海外との交流の中で生まれた芸術を積極的に海外に紹介する海外巡回展。2003年から始まったくまもとアートポリスの海外巡回展は早くも7年目を迎えた。

昨年度末までに20カ国39都市で開催されたが、今年新たに4カ国、5都市を巡回。また、巡回展開催に併せてアートポリスに関するレクチャーなども開催されており、アートポリスの国際的評価と認知度は更に高まっている。

海外巡回展会場風景（ロシア）

2003年	ブラジル、米国（2カ国、4都市）
2004年	米国、アルゼンチン、ボリビア、ニカラグア、ホンジュラス（5カ国、7都市）
2005年	コスタリカ、カナダ、米国、ベネズエラ（4カ国、7都市）
2006年	カナダ、マレーシア、モンゴル、ネパール（4カ国、5都市）
2007年	ベトナム、韓国、インド、ニュージーランド（4カ国、11都市）
2008年	ニュージーランド、オーストラリア、スリランカ、トルコ、イエメン（5カ国、9都市）
2009年	ポルトガル、リトアニア、ロシア、レバノン（4カ国、5都市）

※国際交流基金とは文化交流の促進を通じて、日本と諸外国との相互関係を深めるため、1972年に設立された外務省所管の独立行政法人。

発　行
くまもとアートポリス事務局（熊本県土木部建築課内）
〒862-8570　熊本市水前寺6-18-1
TEL096-333-2537　FAX096-384-9820
kenchiku@pref.kumamoto.lg.jp
http://www.pref.kumamoto.jp/site/artpolis/

21　土　建
③　001

KUMAMOTO ARTPOLIS NEWS vol.35

くまもとアートポリスプロジェクト
熊本駅東口駅前広場及び関連施設整備
球泉洞休暇村木造バンガローR2「Wooden Lace」
菊池市街地ポケットパーク
宇城市立豊野小中学校
宇土市立宇土小学校・網津小学校
熊本駅西口駅前広場

プロジェクト速報
新規プロジェクト
・白川河川敷利活用事業（公衆トイレ）
・熊本南警察署熊本駅交番
くまもとアートポリスプロジェクト受賞報告

トピックス
第15回くまもとアートポリス推進賞
視察状況
くまもとアートポリス海外巡回展

くまもとアートポリスニュース第35号
2010年3月発行